



特別展 「嶋遺跡」

人の心をとりもどす拠点を

大友 義助

社会が混迷の時代にはいると、人々はいつても「古典」にかえり、それを足がかりに危機をのりこえてきた。西洋の歴史にみるルネッサンスがそれであった。この頃叫ばれる「原点にかえれ」というのも、これと相似た意味をもっているように思われる。

ところで、博物館は、その機能において、こうした意味の一つの「古典」たり、「原点」たり得ないであろうか。少くとも、この余りにもあわただしい世の中においては、この方向に向って機能するよう努力すべきではないだろうか。技術が進歩し、万事が便利になればなるほど、ほんとうに求められるのは、人間相互のあたたかい心の結びつきである。

遠い昔の人が作ったものには、何かしらあ

たたかきがある。単に使うためにのみ作ったものであろうが、背後には直接に人間がある。博物館はこれらの資料を多く収蔵している。これらの資料をフルに活用して、人の心の回復に少しでも役立つべきではないだろうか。

都会に出た人々が、正月や盆の季節、あれほどの混雑にもかかわらず、故郷に帰りたがるのは何故だろうか。所詮人間は機械ではない。やはり、求めて止まないのは人の心である。自らを育ててくれた山や川、古い家、それをめぐる草木のたたずまいである。

一見最も静的にみえる博物館は、今日の激動の時代においては、人間の心をとりもどすために最も動的なはたらきを要請されているといわなければならない。【考古担当】

— 展 示 室 か ら —

**動物**

庄内海岸や飛島の海岸の磯をのぞいてみて驚くことは、以前と比較して、海岸動物がめっきりすくなくなつたことである。

山形大学鈴木庄一郎先生の現在までの調査結果では、庄内沿岸の海産無脊推動物の種類は997種数えられている。

又、庄内の海産動物の分布は特に南からの対馬海流と深い関係があり、暖流によって運ばれ、庄内海岸にすみついた南方系の種数は約90種ほどあるという。

カニ類は十脚目短尾類に属して庄内海岸では73種ほど知られているが、ほかに異尾類に属しているカニも何種かある。

ケガニ、ガサミなどのように食前にあがる種類や磯で見かける種類をのぞいて、一般にはほとんど知る機会がないが、32種類の乾燥標本が展示されている。(奥山)

**植物**

曹源寺のヒサカキ

— 山形県の天然記念物 —

西田川郡温海町大字鼠ヶ関字横路の蓬来山曹源寺の後庭の適潤な緩傾斜地に植栽された2株の老樹である。左の株は根元周囲2m、右の株は19m、樹高両株ともに4mほどである。枝は両株ともに細密に分枝し、ところどころで連理型をなしている。

このヒサカキは、今から350余年前、佐渡の国金北山の僧侶、峯庵禅師によって手植されたといわれている。禅師は諸国巡行の折、不幸にして烈風にあい、命からがら念珠の浜に漂着した。そして、この地の名刹曹源寺に旅装をとき、多くの人々に懇ろないたわりを受けた。

この温情に感激した禅師は経を唱えつつ手植したものと由来伝説にある。

(吉野)

**地学**

ケイカ木

ケイカ木は、植物が地中に埋もれ、木の組織にケイ酸(SiO_2)をふくむ地下水がしみこんだため、おきかえられて非常に堅くちみつになったものである。

ケイ酸で十分におきかえられたものは堅くしかも美しい木目を残しており、床柱、盆石や飾石などに用いられている。

しかし、植物が地下にあっても、堅くない部分もある。それは、ケイ酸のしみこみがなかったため、これを埋もれ木とよんでいる。同一植物でもケイカ木と埋もれ木ができるのは何故だろうか?

以上のように、植物などをケイ酸が交代することをケイカ作用というが、その詳細なしくみについては、まだ未解決な点が多いという。

ケイカ木を偏光顕微鏡で見ると、タンパク石、玉ずいやセキエイなどからできている。

本県では、過去において激しい火山活動がおこったので、各地にケイカ木が発見されており、広く親しまれている。(菅井)



考古 古墳時代

墳墓形式の特質より4～7世紀にかけて考古学では、古墳時代として位置づけている。

山形県下には、古墳時代前期に比定される古墳は現在発見されていない。ほとんどが後期初頭から終末にかけてのいわゆる小円墳の古墳群である。その分布は山形市を中心とする村山、高島・南陽を中心とする置賜にあり、最上・庄内は皆無に等しい。

特に竪穴式石室をもつ古墳は村山に多く、横穴式石室をもつ古墳は置賜に多い。それぞれ村山型・置賜型として2大別されている。

本展示コーナーは各古墳より出土した武器・装身具をはじめ、同時代と考えられる集落跡より発見の土師器や石製模造品、又各種「ハニワ」の模造品等を展示し、古墳時代の文化の様相がわかるようにしてある。(佐々木)



民俗 最上川の河岸

最上川交通は平安時代から行われており、室町末期になると最上義光らの指揮により酒田から舟町あたりまで上流に逆のぼることができ、その後米沢の糠野目に舟着場が作られ、内陸地方の唯一の主要交通路であった。

江戸時代は大石田河岸を中心に川番所、川舟会所が生れ、仲継地として発達した町であり、大石田より上流の方を上郷と称し、米沢藩で作られた小鵜飼船を利用し、紅花や米を運んでいた。大石田から酒田までは大舟と称される「ひらた舟」などがあり、前者の舟より大きく、底が平底で横巾があり、米俵は250俵位つんだといわれている。

大石田河岸は190船持った時代もあり、江戸時代中期に最も繁栄した河岸であった。

(板垣)

県内博物館めぐり



この博物館は、朝日連峰の国立公園指定をキッカケに大井沢小中学校が始めた自然研究活動が認められ、これが発展して29年町立の

－西川町立大井沢自然博物館－

自然博物館として建てられたものである。

国道112号線から分かれ朝日連峰のふところ深く入り込んだ中村の部落に、山里には珍らしく一目でそれと知れるモダンな建物である。鳥類102種、哺乳動物26種、昆虫571種、植物181種その他魚類民具など、展示室には処狭しと陳列され中でもカモシカの胎児や高山の鳥類など月山朝日の豊かな自然を物語っている。昔は多雪地で往来も途絶え大変な処であったが、今は自然の環境を残す貴重な土地柄となった。夏は登山に加えて「ふるさと民宿」も盛んだ、いつまでも日本人のふるさととして人心をなぐさめ、いやしてもらいたい。入館30・学40・大人50円、団体割引有。

館長(大井沢小中学校) 今田惣太郎氏

(村川担当)

山形県の古い岩石と変成帯

菅井 敬一郎

世界中で最も古い岩石は、西グリーンランドの片麻岩で、39億8千万年である。わが国では、昨年、岐阜県より発見された片麻岩の礫が、いまから約16億年前の年代を示したという。これは日本最古の岩石であり、先カンブリア時代のもつと確認された。

では、本県の最も古い岩石は、どんな石であろうか？ それは、いままで地質学者によって研究されてきたが、まだ十分なデータが得られていない。特に、花崗質岩類による接触変成作用との関係が不明である。

ここでは、本県の古い岩石や変成帯の問題を簡単に紹介したい。

古生代の地層

県内の古生層は、おもに朝日山地や飯豊山地のまわりに分布し、一般に非変成古生層地帯に区分されている。この岩石は、粘板岩、砂岩やホルンフェルスである。(第1図)

その年代は、約2億2千万年前の古生代二疊紀と推定されている。これは、飯豊山麓(福島県)の粘板岩にはさまれている石灰岩から、示準化石であるフズリナが発見されたため推定されたものである。

この地域の岩石には、弱い変成作用を受けたホルンフェルスや砂岩が露出する。変成岩は角閃岩相に属し、変成度の高い方では、黒雲母-白雲母-カリ長石-石英-ホルンフェルスがある。また、出現の少ないと言われるザクロ石(アルマンディン)ホルンフェルスがみつかった。

以上のほか、更に古い岩石を考えている学者がある。それは朝日岳の片麻岩である。



第1図 古生層と阿武隈変成岩類の分布

すなわち、古生代二疊紀以前の非常に古い地層が、変成作用を受けて、現在の大朝日片麻岩になったとする考えである。そうだとすれば、その原岩は、ずっと古く古生代の前期?に属するだろう。

関根・栗子変成岩類

米沢市関根や栗子付近には、変成岩が露出している。これらも古い年代の岩石と考えられている。岩石の種類は、角閃岩、黒雲母片麻岩、黒雲母片麻岩、ホルンフェルス、晶質石灰岩、



第2図 日本の変成帯(都城秋徳による)

(大理石)、砂岩や千枚岩などである。

本地域の変成岩の化学成分をみると、石灰質分や鉄分が多い。また、竹貫地方の変成岩と比較すると、より酸性であるようだ。前述の粘板岩とは、化学成分や鉱物成分で大きく異っている。

変成帯

日本の変成帯は、第2図のように帯状に分布している。しかも、2つの変成帯が対(ペア)となって在存している。この変成帯には、各種の変成岩ができています。しかし、その成因や時期については、まだ論争が続いているくらい問題が大きい。

ところで、本県の変成帯は、領家-阿武隈変成帯の延長とみなされている。中でも、関根地区の変成岩は、竹貫地方のそれと類似しているといわれる。

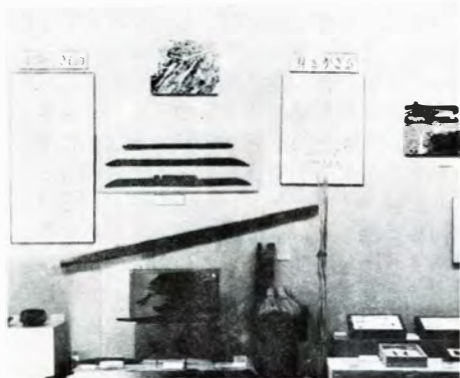
この阿武隈変成帯の北方への延長は、さらに北北西のびて、蔵王山の基盤岩、神室山周辺、朝日岳付近の片麻岩も、この帯に属するかもしれない。

変成の時期は、同位元素による年代測定から明らかにされ、約1億年前後の中生代と推定された。しかし、それ以前にも古い広域変成作用があったとする考えもあるが、その時代や原岩の時代については、不明な点がある。

以上のように、山形県には、古生代の岩石が各地に散在しているが、猪苗代湖-米沢-朝日岳(?)-(?を結んだ線の両側で、大きな相違がある。そして、検討を要する問題がある。

いずれにせよ、本県を縦断するような変成帯が存在していることは、地質学上の特徴であり、日本列島の成因を考える上で重要な問題である。

特別展「嶋遺跡」について



嶋遺跡特別展は10月12日から11月30日までの会期で開かれている。

嶋遺跡は山形市の中心部から北西約4km、馬見ヶ崎川が形成した扇状地の扇端に位置している。昭和37年春以来5次にわたる発掘調査が行なわれ、多数の住居跡、倉庫跡、木製品、土器（土師器・須恵器）、炭化粃・麻の実、装身具（骨製整髪具・玉類）などが発見された。

木製品には、踏み鋤・手鋤・鋏・大足など

の農耕具、曲もの・柄杓・鉢風の容器、馬に乗る折の鞍、丸木の弓、織具の部分、住居や倉庫の構造材と思われるものなど、当時の稲作の実態、農民の生活の有様を具体的に物語るものが多い。

嶋集落が栄えた時代は、遺物から推して、7世紀初めから8世紀前半と考えられる。すでに律令制度が整備され、奈良の地方を中心に文化の華が咲き誇っていた時代である。わが山形県も、712年には秋田県とあわせ、出羽国として独立した。

しかし、このような社会を支え、時代をおしすすめてきた庶民のすがたは、書かれた歴史には殆ど現われてこない。彼等は、何を食べ、何を着、どのような家に住み、村をつくり上げてきたのであろうか。

嶋遺跡展は、これらの疑問に答えるべく、同遺跡の発掘調査によって発見された数々の遺物を、稲と農具・食生活・織具と着物・住まい・身をかざる・信仰・鞍橋と弓矢などのテーマに従って分類展示したものである。

1300年の年月に洗われた一つ一つの遺物が、当時の庶民の哀歓をいまに伝えてくれる。（大友）

第20回全国博物館大会に参加して

今大会は9月19日から3日間札幌市で、およそ350名が参加して盛大に開かれた。国鉄の順法斗争と台風20号のダブルパンチで交通は大混乱となり、50時間がかかりで辿り着いたという人さえあり、参加者の苦勞が忍ばれた。

大会テーマは「現代及び将来を考え、人類に奉仕する博物館の役割—教育的文化的役割」という大変調子の高いものであったが、セミナーにしても内容が小さく、人類に奉仕するといった処までは論議が及ばず残念であった。大会に臨んで感じた点を簡単に述べてみたい。

1 協会の在り方について 動物園から美術館まで参加範囲が広く、問題の的が絞りにくい、同系館のまとまりの上に協会活動を展開する運営システムを構成したらどんなものか。

2 「人類に奉仕する博物館の役割」この大会テーマこそ、現在博物館の最も重要な命題であろうと思われる。各館それぞれの立場でジックリと考えてほしい。

3 博物館が社会教育機関であるということ



について 教育活動は、資料の収集保存、調査研究と並んで館業務の中の一部であることを文部省は深く理解し、博物館の特性が充分活かされるように行政を進めてほしい。

4 創造性と連帯性について 外国博物館の物まねでなく、置かれた条件の中で独自の創造性を発揮すると共に、他館との実質的な提携を強めてゆきたい。（業務課長 村川信夫）

博物館を見学して

山形の県立博物館を訪れた時、私の脳裏をかすめたものは、2年間の海外放浪生活の中で見てきた各地の小さな地方博物館。そこには無論、国宝級の資料や大英博物館の称に世界の珍しい資料はない。しかしそこには、その土地の香りを濃く漂わせんばかりの豊かな庶民の代表芸術の資料が展示され、私の心をうばったものであった。そしてその展示形式は当博物館のそれと共通するものがあることを感じた。

今度私も郷里で仕事を始め称と決心したのも、遠く外地で「ふるさと」をこよなく愛した心の表われであろう。

「郷土写真の製作を！」この郷里に帰った初心の目的を忘れぬ様に私を励ましてくれるのも山形県立博物館の資料の数々である。

(山形市写真家 竹田定昭)

特別展「鳥海山の自然」ということで、我々化学研究会一同は、専門外ながらもこの夏休み鳥海山の麓の湧泉調査を実施したばかりなので、一種の期待感と興味をもって見学にいった。それだけに見学人が少ないことや、会場案内が不徹底であることには一寸がっかりした。

内容に関して、動物部門の魚類の標本資料があまりにも時間を経ているせいか、原色とかけはなれていて誤解を生ずるのではないかと思われた。しかし長所として、鳥海山の生成過程などは模式化し、かつ色刷りでくふうのあとが見られ、誰れがみても簡潔明瞭でわかりやすかった。この見学に際して、我々も今までこのような機会があまりもてなかったので大変勉強になったと思う。そして今後もこのような機会を持つことが大切だということを感じた。(山形大学学生 館 雪雄)

＊ ＊ ＊ た よ り ＊ ＊ ＊

－ 9・10月に

開かれた講演会・その他－

○ 講演会と山形考古学会研究発表会
特別展「嶋遺跡」の開催にちなみ、去る22日、山形大学名誉教授柏倉亮吉先生を迎え、「山形県の古代農民の生活」と題する講演会が行なわれた。当日は、庄内・米沢方面からも出席者があり、会場に入り切れないほどの盛況であった。

講演の内容は、嶋遺跡の出土品を中心に、最近調査された東根市本郷の条里制遺跡などにもおよび、感銘深いものであった。

また、午後からは山形考古学会研究発表会が開かれ、山大教育学部歴史学研究会の「石箱下遺跡調査概報」・真室公一氏「米沢市の考古学の現状について」・川崎利夫氏「北海道十勝太における擦文文化期集落跡の調査」などの発表があった。なお、同会の決議として県内遺跡の保存を関係方面に呼びかけることにした。

- 特別展 「鳥海山の自然」
9月5日から9月30日までの間開催され好評のうちに終了した。
- 山形県立博物館協議会
10月25日今年度第一回協議会が開催された。

11・12月行事予定

- 映画の集い
祭日は休館日になっていますが、11月3日「文化の日」に限って毎年開館されることになりました。今年は行事として「映画の集い」も開催されます。
- 数馬遺跡発掘調査
飯豊町中津川数馬遺跡(縄文晩期)は、白川ダム建設にともない水没の危機にあるため10月30日～11月2日、予備調査を行う。
- 特別展 「山形県のおしげ展」
昭和47年12月5日～昭和48年1月31日
この催しは山形県植物の分布、分類を概観できる絶好の機会であるとともに植物同好者相互の情報交換の場等、多くの役割を果たすものと考えられます。
多数ご観覧くださるようご案内いたします。
- 本年度第2回民俗資料研修会
昭和47年11月5日(日)

山形県立博物館ニュース 第10号◎
昭和47年11月1日発行
山形市霞城町1番8号(〒990)
山形県立博物館 (TEL 62-1111)